



共同印刷 60 年の歩み

『竹 早 町 の 坂』

(1) 地の利

史談会開催日

昭和 43 年 (1968 年) 3 月 26 日

14 歳から今日まで、共同印刷に勤めあげることが出来たもの、一つには父親が茗荷谷、母親が清水谷、そして共同印刷が小石川にある、という地の利に大に関係したことだったと思います。祖父は茗荷谷で漢方医をしていたが、父は病身で生活がたたないというようなことから親戚に養子にゆき、鈴木姓を名乗るようになりました。結局、早く仕事を覚え、一人立ちして、親の面倒をみなければならぬというような状況だったわけです。

当事、精美堂の営業部に浅羽さんという人がいて、その方と私の母同士が、宗教関係と言うような間柄でした。父が弱いため母が宗教の道に入り、そこで浅羽さんのお母さんと知己になったようです。それで母同士のつきあいの中からも働かせたほうがいいだろう、というような話が出て、精美堂に入社することになったわけですが、その入社のも動機もいま考えてみればおかしなものでした。

浅羽さんに勧め口を頼んでおいたものの、そう急に良い口はないだろうから、内国博覧会の給仕でもやってもらおう、というような話でした。ところがある朝、その浅羽さんに連れられて竹早町坂を下り、精美堂の門をくぐったのです。「博覧会というのに、どうも変なところへ来たな」と思いましたが、そこで浅羽さんが言うには博覧会などは一時的なものでどうしようもないから、今日からこの精美堂で働いたほうが将来のためになる、ということで、その日に精美堂に勤めるようになった次第です。

ただもう無我夢中でしたが、印刷工場というのは臭いところだなということが第一印象でした。こんな臭いがある所で勤まるだろうか、という不安感もありました。その臭いは、揮発油の臭さで、現在のガソリンのように無臭無色ではなく、初めて嗅ぐと頭が痛くなる代物でした。慢性になると気にならなくなりましたが、入った当

■ 語る人

鈴木 喜三郎 氏
(共同印刷顧問)

■ 【鈴木喜三郎氏略歴】・

- ・ 明治 27 年 9 月 28 日東京に生る。牛込・赤城小卒。明治 40 年精美堂入社、平版印刷係長、技師、平版課長、技術部長と累進、戦後も共同印刷技師、研究部長、理事、参与を歴任された。また東京インキ監査役、小森印刷機械製作所顧問も務められた。
- ・ 昭和 36 年野間賞を受賞

初はその臭いがどうしても自信を失わせていました。

当時の精美堂の事務所には大体 10 名ぐらいの人がいて、経理を担当していたのが、現在神田にある精興社の白井赫太郎さんでした。工場のほうには、のちに同心町で自営した、武藤武さん始め 50 名ぐらいが働いておりました。

設備はドイツのヒューゴ・ゴッホ会社の四六半裁石判ロールが 3 台、それから会社名はわかりませんが、イギリス製の四六四裁の機械が 1 台入っておりました。これらの機械は現在とは比較にならない原始的な機械で、プリントしても紙をあおってくる設備がなく、一回転して紙が通ってくるたびに、小僧が一枚ずつ手で取っていました。インキ装置は今とあまり変わりがなかったんですが給水のほうは棒の先に海綿を結わえておいて、何回転かするたびに水盤に水を与えるというような機械でした

そのような原始的な機械の中に 1 台、アメリカ・アルミニウム・プレス社の四六倍判の機械がありました。この機械はのちに三間印刷に移しましたが、当時四六倍判の機械は、民間煙草の仕事をしていた京都の村井さんのところにだけしかなかったのではないかと思います。むろん手差しですが、とにかく大きい機械で、紙を差すステップに乗っても、私などには胸のところまで届くほどでした。

(2) 小僧の仕事

今の若い方にはピンとこないかもしれませんが、その四六倍判の機械は、むろんアルミの板の直刷りでした。技術者関係のことを申し上げますと、石版のほうでその 4 台の機械についていたのは、深川の「東京印刷」の人たちでした。東京印刷は渋沢系といいますか、第一銀行の関係といったほうがいいと思いますが、その資本が入っていた会社でした。この東京印刷で修行した方々が多く来ておられてやっていたんですが、アルミ版の機械は、東京に技術者がいなくて、関西から製版、印刷の技術が来ておりました。これは推測なんですけど、当時の交通事情を考えると、上海に行くのには東京よりも関西から行くのが便利だった、ということから、関西に早くアルミ版の大きな機械が入り、技術者もそこで育ったんだろうと思います。たしか製版には浜本という人、印刷には藤松という人が来ていたと思います。



とはいっても、東京・本所の栄光社さんにはアルミの機械が入っていて、そこから大塚という人が来ていました。私の記憶にはやはり技術の良い人、自分が指示を受けた人の名前が残っています。そのうち量産をしなければならない、ということでヒューゴ・ゴッホの四六半裁の寸延びの機械が明治43年に入ってきました。

それからまたアメリカのアルミ版の機械も入ってきましたが、その中にパン粉が着いて真っ白になった機械がありました。不思議なことがあるものだと思っていましたが、技術者に聞いたところによると、渡辺印刷という会社が破産して、機械は木村屋のパン工場の中に眠っていた、ということでした。パン粉と印刷機、まことに奇妙な取り合わせでした。

優秀な技術者といえる人は、石版では神田の遠藤石版所というのがありました。その水生という人が優秀でした。秋田県の士族の出身で、中等教育も受けた人でこの人に師事しまして、私も非常に勉強になりました。当時の徒弟というものが、どのような仕事をしていたかというのも、今の人たちには興味があるんじゃないかと思えます。

機械を動かす動力は、ガスエンジンで17馬力のエンジンが一基据わっていました。各機械は天井裏にカウンターシャフトでベルトをとって一台一台運転させていました。小僧として入ると、ほとんど2年ぐらいは使い走り、なんでもやりました。ガスエンジンを始動させるためには、これを手回して回してやらなければならないので、朝時間になると小僧たちが蟻がたかるといいますか、はずみ車に4、5人かかってやりました。これが朝の大きな一仕事で、夏場はいいんですが、寒中には何回も手で回さないとピストンが動き出しませんでした。小僧は朝は技術者よりたいてい30分くらい早く行って、石版ロールですと下へもぐって、重要なクランクの元軸のオイルカップに補充をし、寒い時には炭火を熾して、技術者の来るのを待ったものです。

容易でなかったのは、エンジンを冷やす冷却タンクに給水することでした。冷却タンクは2メートルぐらい高いところにあり、直径も1メートルほどありましたが、工場の回りを一回り掃除して戻ってくると、もう水が温まってしまっていて、エンジンが破裂するぞと脅かされるというようなことでした。今から考えれば誠に原始的なものでしたが、その給水は小僧の仕事の中でも苦勞するものでした。



(3) 金寸と石版

ご承知の方も多いと思いますが、原色版は、初めから間紙を使っていたのですが、インキが今ほど進歩していませんし、紙も悪いということで、小僧の仕事はそこでまた増えているということでした。紙は自然乾燥で、天井に竹ばさみで吊していましたが、その吊す作業も仕事となっていました。間紙を入れるのも石版では1分間に15枚くらいをやり、また多色刷では間紙の抜き差しということを繰り返してやるようになるので大変でした。そのほか技術者の使いにやらされたりで、2年くらいは夢中で働いたというようなことです。

3年目くらいからはやっと紙を差せるようになり、これもまた3年くらいは続けなければならず、そのうちこれならという優秀な者に機械を使わせるという順序になっていました。

石版の時代でもう一つ厄介な仕事は金付けで、機械がありませんから手付けでやったものでした。先程お話ししました精興社の白井赫太郎さんが青梅の出身で、その関係で青梅の織物企業組合の仕事が大量に入ると、あの頃の丹物には金ベタの白抜きをした帯紙がついており、それを一週間くらいかかって金付けしたものでした。裏の空き地に小僧が小屋を作って、機械場からそこまで運んで金付けをするというようなことでした。その方法はビロードの袋の中に綿を入れて布団を作り、それで金を刷り込むんですが、これにもコツといったものがあるもので、模様が多いものにはそれに合った金粉をもっていって、一応全面に行き渡るようにし、さらに刷り込むといったことでした。この刷り込み方で金付けの価値が決まると言われました。習熟するにはかなりの年月がかかったようです。

そういったことで明治の時代を過ごしてきたんですが、私が、小僧の修行をしている間に、後輩が一人印刷界へ入ってきました。岩崎という男でしたが、私よりも勉強してきたとみえ、同じ仕事をやるなら日本一のところへ行きたいということで三間印刷へ移りました。それでやっと三間印刷の様子がわかった次第です。というのはそれまで「三間でどうしてこんなに良いものが出来るのか」と不思議に思っていたからです。

三間には非常に腕のよい画工さんがいて、号は綿秋と言ったと思います。今日の写真製版と違って当時は絵心がなければ画工にはなかなかしてくれない時代で、石版画工の中から立派な名のある画家



が出ているくらいです。その方がいたので、他からの追従を許さないという状態でした。ポスターでも三越とか他の有名なところの仕事は大抵三間へ行くというように。

ポスター日本一は三間印刷ということは、私どもにも相当勉強になりましたが、それはともかくも石版の石というものは重いもので、紙差しをしていた頃には、版が出来てその角を落とすのが一仕事でした。やすりをかけて面を丸くしておかないと、石が炭酸石灰質ですからちょっと角があっただけで、蛤の貝を二つに割ったように中へ割り込んでしまうので、この面取りは先輩からも五月蠅く言われました。それから版盤の中へ入れるのも重量があるので、小僧が二人でやっと持ち上げるというようなことでした。

(4) ひげの話

石版の話が続けますが、精美堂では先程申し上げたように、石版ロールの半裁の寸延びの機械を使っていました。石版の石というのは、面をとって、それから版盤の中に入れてんですが、何分にも石ですから版に高低があります。それは定規をあて高低を定めませんが、平版だからといって今日のように100分のいくつかを争うようなことはとんでもないことでした。ですから極端なときは100分の50ぐらいの誤差は出ていました。石の下に入れるパッキングですが、圧力が加わっても平均にかかるように、石のほうを合わせなければならず、たまたまごみでも入っていると、真直ぐに切れて割れてしまうということになり、かなり神経を使って段差をつけて水平を保ったものです。これもやはり紙差し時代の仕事であったわけです。

精美堂では、文部省の歴史の掛図をよく刷ったんですが、これは模造紙に刷るというもので非常に繊維が丈夫だということで、多少折りくせをつけないと皺が出るという問題がありました。折りくせをつけるために紙のコマをさっと擦ると、まるでカミソリで切ったように手が切れるという危険もありました。この掛図の仕事ではB半裁の大きさのものは精美堂でやっていましたが、たまたま四六全判でやっているところがあるという話を聞きました。それは浅草・馬道の塚本造画館というところで、四六全判を二面付でやっているということでした。果たしてそんな大きな石をのせ圧力をかけてやれるのか、また持ち運びをどうしているのか、ということが疑問になって、友だちと一緒に覗きに行きました。B判でしたら60貫以上ありますが、これをどう扱うか興味があり、普通私どもでは小僧が腰



の反動で台の上に石を上げて、面とったりをするということをやっていたわけです。四六全判をどう扱うか見ていますと土建屋が使う滑車を使って、吊り上げて2人ほどの小僧が台の上に乗せているということでした。なるほど石版でも四六全判が出来るんだな、ということに感心して帰ってきました。

技術者は多く東京印刷から来てやっていた、それからアルミの機械には関西から来た技術者がついていたということは先程お話ししましたが、関西から来ていた連中は、やはり当時としては珍しい人間が多く、髭をたくわえているような人もいました。当時は官吏でもなければ、髭を生やすということをしなかったんですから、珍しいといえば珍らしかったんです。浜本という人もやはり髭を生やし、通勤にも背広を着て髭通い、作業をするのにも、ズボンにチョッキというようなスタイルでやっておりました。その当時の私どもの作業姿は、上は半てんでそれが腰までしかありませんから、下は腰巻をつけたり、前掛けをかけたりしてやっていました。東京で育った人の中にはハイカラな人もいて和服の上にトンビを着てやっているとというような人もいましたが、関西の人はそれ以上にハイカラといえますか、変った人がいたように感じております。

(5) 粗面の紙

その頃の印刷工の賃金のことですが、15、6才の小僧ですと、15銭から17銭ぐらいのところ为标准で、紙差しになると50銭から60銭見当、それから機械の主任になると——これらの人々のことを「ロール屋」と呼び、関西では「ミシン使い」と称していましたが——1円から1円50銭だったように思います。アルミの技術者のほうが石版技術者より、10銭から20銭程度高いようでした。

画工さんと私ども小僧とは、何か一線が引かれているような違いを感じたものですが、画工になると「先生」と呼ばれていたから、確かに格が違っていたのでしょう。画工—製版—印刷と比べてみると、やはりいつも印刷は割の悪いような感じがしたものです。昼飯時になると私は博文館の賄い所でお世話になったんですが、そこでは並の弁当が5千、上が8銭でしたが、上といっても肉に卵をかけたぐらいのものでした。その頃の職人の風姿と給料と食事の具合はそんなようなものでした。

明治40年から45年までは、そんなふう過ぎたわけですが、今

の会社の土地は地盤が低くて、水害の多いところでした。水が出ると竹早町から下りてきたところにある宗慶寺から御殿町の植物園のところまで渡船でなければ渡りきれないというようなこともありました。明治43年のことだったと思います。そんなふうな、今ではとても考えられないような出来事の中で、明治の末から大正時代を、小僧から紙差し、ロール屋と修行してきたわけです。そしてアルミに移っていったんですが、私がアルミに行った頃は関西から来ていた職人は既に辞めて、東京で育った職人がやっておりました。

大正に入ってアルミの機械が増え、末年までには11台になったと思います。あまりはっきり記憶が無いんですが、中村さん（中村鉄工所）、真島さんなどや桜井印刷機械、博文館の鉄工部からも入れて、輸入機械と合わせて11台だったようです。アルミの全盛時代というべきものは、大正5、6年頃までだったんですが、石版の時に多色刷りでは間紙を入れるということを申し上げましたが、石版・アルミ併用の頃には、アルミの多色では間紙などももちろん入れられないし、どうするのかと疑問に思っていました。これはインキの中にコンスターチを入れて裏移りの防止をしてありましたが、こういう技術はやはり関西から入ってきたんだと思います。

そのうちに、まだ浜田さん中村鉄工にいた頃だと思いますが、国産のオフセット機を製作し始めたということがありました。私ども現場のものには、はっきりわからなかったんですが浜田さんが自営された年代から考えると、たしか大正10年までには、中村鉄工のオフセット機全判4台、半裁3台くらいが入ってきたように思います。最初半裁のオフセット機が社に入ってきたとき、直刷りからオフに移行したものですから、なんといっても、なかなか濃度が出ないことで、技術者かなり苦しんだことと思います。また私どもはオフセットについてそんなに勉強する機会もなかったものですから、結局粗面の紙に刷るということがオフセットの特徴であるというくらいにしか理解しておりませんでした。ですからインキの濃度が強くなるというようなことはとても望めず、ただポスター紙のような粗面に完全につくということで、少し力強いペーパーには、オフセットはとても使いものにならないような時代でした。



(6) 輸入機

たしか大正7年だったと思いますが、一番早くにアメリカのポッターの菊全が2台入ってきました。最初に入ってきた機械はどうい

う行き違いからか、フィーダーの片方が入っていないので、フィーダーデキスターの外国のものでもそういうこともあるのかと不思議に思ったものです。それで浜田さんにコーナー一組そっくり造ってもらい、なんとか稼動するようになりました。それが機となって浜田さんもフィーダー付印刷機を製作する方向へ向かっていったと思います。

それより少し前、大正4、5年頃、神田・鎌倉河岸の市田オフセット会社にハリスの機械が入り、そこには美術印刷の市川憲次さんにお世話になった杉江という私の友人がいて、ハリスの半裁は1分間に100枚刷れるから見に来てくれ、というので見せてもらいましたが、事実100枚やっておりますして私も驚いて、国産機などではなかなか追いつかないということを感じました。

その時、精美堂にはハリスの菊全が2台入ってきました。今考えてみますと機械の性能はハリスが一枚上ではないかと思われませんが、作業性の点ではポッターのほうが使い良かったように思います。

ハリスの欠陥というと、当時、紙質も良くありませんでしたし、断裁機の精度も正確にいかないで、刃を替えるたびに彎曲して出てきたりして、結局フィーダーからの咬え込みの力で割り込ませるので、彎曲しようが、出っ張っていようが、そこまで機械に対する精度が考慮されていませんでした。いろいろ苦心してあて付けをつけて皺を出さないようにしたものです。

石版からアルミになるにしたがって、紙を天井から吊す自然乾燥では間に合わないで、ストーブを2台持ち込んで、乾燥機にして、煙突も室の回りをまわって抜けるようにしましたが、最初は外に竈がなく、まるで風呂を炊くような形でした。結局精美堂にはポッターがA・Bあわせて8台、ハリスもまた8台は入ってきたことになります。

そんなふうに外国機なども入って印刷技術にも新しいものが現れるようになってきましたが、一方精美堂は大正4年にレンガ造り、2階建の第二工場が完成し、動力が今度は電気によって変わってきました。たしか明電舎の15馬力のモーターが3器入ってきてだんだんと自動に置き換えられてきたように思います。小僧時代にガスエンジンのはずみ車を回したことを考えて、非常に感無量になったことを覚えています。

オフセットに手をつけ始めた頃に、今度はアルミの板をジंकに



変えていくということがありました。それが大正 3、4 年の頃と思いますが、精美堂ではちょうど工場長が変わり、砂目ジंक版の研究を指導していました。いま申し上げても若い方は不思議に思うかもしれませんが、タンニン酸が版処理に良いということで、水の中に番茶の煮出したのを入れたりしたこともありました。

なんと言いましても精美堂にとって大きな事件は大正 12 年の関東大震災でした。これは精美堂に限ったことではなく、東京全体がこの事件を契機としていろいろな試練を受けたことになります。

(7) 揺れる大正期

大正 11 年に鉄筋コンクリート 3 階建の建物が完成し、これは博文館と精美堂それぞれが同じ型の建物にしたものです。12 年の震災では、博文館の建物が倒壊し 47 名からの圧死者を出しました。精美堂からも救助に行きましたが、なにしろ鉄筋の建物が倒れるということは私ども素人考えではどうしても腑に落ちないことでした。鉄筋コンクリート建てが倒れるはずがないという気持ちをずっと持っていたんですが、実際倒れることがあるもので、ただ横倒しに倒れるということではなく、上から下へ潰れるという状態でした。精美堂は事務所と第二工場の中の煉瓦塀が倒壊して工場の中では機械が前にズリ出した程度でした。

博文館の状態は正に惨状と言うべきもので、赤羽の工兵隊の出動を願い出て救助にあたったわけです。三階に人が生存しているかどうかかわからないわけですから、爆薬なども使えず、三階の屋上から穴を開けて、救助をしました。たまたま私が住んでいた周辺には、博文館の係長級の人がいったりしたものですから、知己の人々で亡くなった方も相当おりました。工兵が掘り出した遺体を植物園まで運んだり、自宅へ届けたりする仕事を手伝いましたが、本当に酷い状態でした。

精美堂にはちょうどマイレンダーというドイツの B 半裁の機械が 12 台入ってきて二階に置いてありましたが、まだ組み立てていませんでした。震災のあと、博文館鉄工所に頼んでこれを組み立てたんですが、ハリス、ポッターに続いて、このマイレンダーだとか、ローランドなど外国機が続々と入ってきました。こうして昭和時代に入ってくるんですが、その前に忘れられない労働争議のことについてお話ししておきます。



大正14年に初代社長が外遊して、その不在中に労働組合が博文館に結成されました。社長が帰朝するときには、赤旗で迎えに出たような具合で、14年、15年はほとんど労働争議で明け暮れたというようなことです。15年になると争議はだんだん悪化してきて、いつ解決するかという見通しも無くなっていました。ただ今だから言えますが、精美堂は引きずり込まれたと言いますか、おつきあいをしたような組合だったものだから、争議が大きくなると皆も不安になって、結局精美堂に今で言う第二組合を結成して作業を始めたものです。博文館からは係長以上を合流させるということで人を集め、仕事を始めたわけです。私も家族を実家に帰して自宅は釘づけにしてしまうというようなことで長引いている間に、ご承知のように王子製紙の藤原銀次郎さん、ダイヤモンドの石山さんが調停に立って妥結の仮調印まで進みました。ところが、すでに精美堂では仕事を始めていたものですからそれが原因で再び悪化するような事態になりました。

結局、仮調印は破棄、全員解雇という結果に終わりましたが、その過程は大変な騒ぎでした。ちょうど構内の通りが一般に解放されていて、柳町方面への近道として利用されていました。争議の途中で精美堂が作業を始めたことが、すぐにわかってしまったことは当然で、その後両方門を作って締め切ると、これに夜襲をかけられたということもありました。大正年間では関東大震災と労働争議がやはり大きな問題だったと思います。

(8) ドイツの機械

争議の後ドイツのホマーグオフセット全輪転機が入ってきて輸入機全盛の時代が始まるわけですが、ここでこれらの輸入機の特徴やそれに関連する話を述べておきましょう。

ホマーグオフセット——A全の縦長機で2色—2色の機械。これはまた3色—1色にも使えるということでしたが、当時は外形写真だけしかなく説明書もない初代社長が心配して東京の機械屋さんにご相談に行きましたが、誰も経験がない。それで私にやれるか、と聞かれて出来ませんとも言えず、また子供の頃からスパナを持ったりするのは好きだったものですから、自分で組み立てたわけです。組み立てるときに感じたんですが、向こうの機械はマークがはっきりついているんですね。それであらかじめ部分を揃えておいて、マー



ク通りに組み立てました。当事国産機では正確にマークが打ってあることは無かったものです。ダブルオフセットということも、説明書が無いものですから初めて突き当たった事実でした。裏表2色の機械でどうしても3色-1色が出来ると一生懸命考えてわかったことは、3色入れるほうには一つ逆版を作って、ブランケットに正向きにつけるという操作でした。このことはその後機械を見るときに非常に参考になりました。

ホットランド——版シリンダーと印圧のシリンダーが2分の1ずつになって、ブランケットのシリンダーが2分の1、したがって2本のシリンダーでオフセットが出来たわけです。この機械はちょっと変わっていてフィーダーがクロスフィーダーと言って、ベルトの上を紙が流れ出して入って行って咬え込む、という機構でした。ちょっとまごつきましたがこれには説明書がついておりました。

ドイツの機械は、輪転が非常に効率良いのですが枚葉の機械は、アメリカのハリス、ポッターには及ばないというのが定説でした。その頃もう一つ納得がいかなかったのは、アメリカのハリスは機械的に非常に性能が良いものですから、シリンダーの脱着が機械的に簡単に出来ましたが、ドイツの機械は電気を使ってマグネットでシリンダーの脱着を行っていました。アメリカの機械があれだけ進歩して機械的にやっているのに、ドイツが電気でやっているということが、どうしてなのかその時分には判断がつきませんでした。今考えてみますと思ひ当たることもあります。そういう点からアメリカの機械は能率が良いのに、ドイツの機械はどうも悪いという感じになってきたと思います。

ローランド——今のローランドを見てみますと感無量ですが、その頃は半裁が2台、全版が1台ありました。むろん半裁の2台は手差しで、全判はフィーダー付でした。これは直接会社に入ったのではなく、東京証券の社長の親戚関係で京都に渡良という印刷会社があって、そこでローランドの全判を入れたんですが、京都ではとても使いこなす者がいないからということで、東京に持ってきたようです。

マイルンダー——能率が低いということを言いますが、大体35枚がやっとでした。むろんフィーダーが違うということが原因でした。あの当時のドイツのフィーダーはクラエムウメラという会社のものを使っていた、咬えのサッカーが平らに当たると紙の凸凹で吸い上げることが出来ないという状態でした。後になると、スプリングが働くものが入ってきたり、あるいはゴムのサッカーの良



いものがきたりして能率が上がりましたが、初期のものは能率が低いという定評をそのまま裏付けているものでした。

(9) 終 戦 へ

戦時中、会社は全工場が爆撃を受け、ひどく焼かれてしまって、ほとんど鋼材は曲がり、鋳物も割れたりして使いものにならない状態になりました。ここから立ち上がるために高能率の機械だけ残し、能率が悪い機械は全部廃棄することにしました。それで結局、高能率を狙って残したのが、ドイツの輪転機、アメリカのハリス・ポッター、それに国産機では浜田などでした。

私は終戦近くなって、越後の長岡へ工場長として参りました。ご承知のように雪の深いところですが、ちょうどその雪の深い季節に共同の社長、重役が長岡へ出かけ、そこにあった新潟日報の長岡支社印刷工場の活版輪転機を運び出しそのあとに私どもが行ったわけです。長岡と言うのは商業地ですから、爆撃を受けるようなところではないと思っていましたが、8月1日に爆撃を受けたものだから、東京へまた戻ってきました。

東京へ帰ってきてからまもなく、芝浦の高等工芸学校が戦火を受け、焼け出された印刷機械の処理を頼まれてやったことがあります。私が高等工芸の仕事をやったのは、伊東亮次先生に幾分でも恩返しをしたいと思ったからです。というのは、ちょうどハリスやポッターが入ってきた当時、現場の連中は歯車のピッチラインということに勉強しておりませんし何もわかりませんから、とにかく納得させようと考え、伊東先生にお願いし、歯車とはこういうものだ。ピッチラインというのはこういうものだということをお話しいただいたんです。これで大分大勢の人にわかってきたんじゃないかと思います。そういうことで先生にお世話になり、また私の次男が学校でお世話になっていたものですから、幾分でもお手伝いしようと思ったわけです。戦争末期になり技術者が足りなくなり、学生の勤労働員を小学生から大学までかなりの数を受け入れましたが、とにかく技術を教えなければ使いものにならない。それで低学年のものには自動給紙機の操作の本をまとめましたが、ちょうどこれをまとめた時分に敗戦になったように覚えております。

——戦後23年の印刷の発展を目の当たりに見てこられて、感想をお聞きしたいのですが…。

鈴木 私は大体こんなふうには思っているんですが、戦後の混乱期に焼機械が動いたということで、町工場などあまり設備に金をかけないで、うまく時期を捉えてまとまったんですね。で、年を経るごとにだんだん進んできて、古い機械をヨタヨタ動かして、いわば人件費が嵩んで採算がとれないから、時代に合った新しい機械に取り替えたのは大資本だったんですが、そのままヨタヨタときたところがバタバタいったんですね。

最近言えることは、印刷料金は上げられない、どうしても大量生産でいくよりほかない、ということで、オフセットも輪転にいくよりしょうがないと思うんですが、どうもグラビアに抜いていかれちゃうような気がするんですね。技術者の立場から言いますと、やっぱりグラビアが楽なような気がするんですね。最近グラビア製版が進歩し、印刷機が進み印刷機の進みというのは圧力関係がウエイトですからね。今は小さなものでも 2000_ ぐらいかかりますから、凹版は軟らかい紙でなければインクが着かないというようなことは無くなって、素人では多色刷りが凸か平か凹かわからないですからね。4 色輪転、6 色輪転という時代が遅からずくるでしょうね。（印刷新報 492 号・新春座談会「明治百年・印刷百年」より）

